

自己調整学習中の協同学習の実施が学習効果に与える影響

1532058 河野拓未

指導教員：山崎治 准教授

1. はじめに

1980年代以降新たな学習スタイルとして自己調整学習とよばれる学習法に関する研究が多く行われている。本研究では、自己調整学習を、学習者自身が学習内容に対して目標を設定し、動機づけを維持しながら進めていく学習のことと定義する。自己調整学習では学習者自身のやる気が学習の質や持続につながる。このような学習者が動機づけを高めていく方法として、動機づけ調整方略(Wolters, 2003)に沿った活動を行うことが挙げられる。

動機づけ調整方略の一つに、「友だちと協力しながら勉強する」といった「協同方略」がある。この協同方略に着目した研究では、協同学習とよばれる他者と学習を行う状況に関連付けて研究が進められており、梅本他(2018)による協同学習と関連付けられた動機づけ調整方略の作成など様々な研究が行われている。

複数の学習者が教えあいなどを通じて学習を進めていく協同学習に対して、基本的には1人の学習活動でありながら、他の学習者と「一緒に学んでいる」という感覚が、学習活動の継続などに影響を及ぼすことも考えられる。このような「一緒に学習を進めている学習者の存在」は「社会的存在感」と呼ばれ、学習への動機づけとの強い関連を持つことが示されている(山田・北村, 2010)。

2. 目的

本研究では、協同学習という学習法に着目し、自己調整学習を行いやすくするための手助けとして協同学習を合わせて行った場合の学習効果を明らかにする。そこで、実験参加者のグループ分けを行い、自己調整学習中に協同学習を行ったグループと行わなかったグループでの学習活動の違いを分析する。

3. 実験 協同学習が自己調整学習に与える影響

3.1 方法

実験参加者：本学情報科学部情報ネットワーク学科3年生17名、工学部機械電子創生工学科2名の計19名(男性13名/女性6名)が実験に参加した。

実験計画：1要因2水準参加者間計画で行う。要因として、学習フェーズ中に協同学習を行う(協同学習あり群)/行わない(協同学習なし群)の2水準を設けた。

装置・環境：事前・事後テストに(株)龍野情報システムが提供するWebアプリケーション「learningBOX」を使用した(以下e-Learningとする)。また事前テスト課題の提示用装置としてHP社製のノートパソコン(Windows10)を用いた。学習課題としてnoa出版「シェーカツトレニングBook 中級編」と自己調整学習をサポートするために自作の計画レポートを使用した。協同学習を行うツールとしてSlackを用いた。

手続き：実験は「事前テスト」「学習フェーズ」「事

後テスト」の3段階で構成される。「事前テスト」ではノートパソコンを用いてe-Learning上で事前テストを受けてもらった。事前テスト終了後に教材を配布し、協同学習あり群にはメールを通じてSlackのワークスペースに招待した。

「学習フェーズ」における学習期間は2週間とした。学習期間中は参加者自身のペースで学習を進めてもらった。また学習期間の1日目および7日目、学習を行った日のそれぞれで学習計画レポートへの回答を依頼した。協同学習あり群では、学習を行った日に計画レポートへの回答と同時にSlack上へ進捗状況の報告を依頼した。

「事後テスト」では参加者には各自PCが操作できる環境で事後テストを受けてもらった。

3.2 結果

本実験での分析対象者は、事後テストを実施しており、かつテキストの半分以上を進めていた11名とした。なお協同学習あり群が6名、協同学習なし群が5名であった。

図1に事前テストおよび事後テストの成績を示す。事後テストでの成績の差をt検定により分析した。その結果、条件による有意な差がみられた($t(8.00)=2.26, p=.05, r=.60$)。

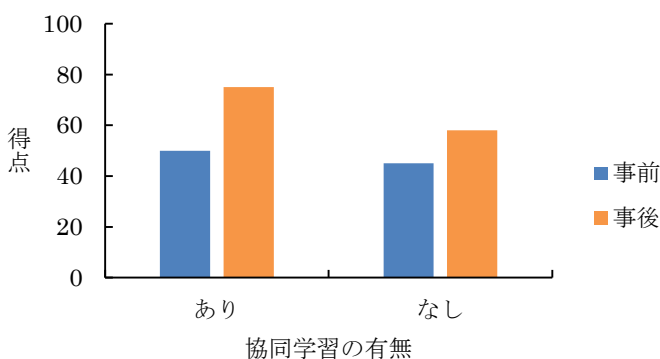


図1:事前テストおよび事後テストの成績

4. まとめ

本実験では、協同学習を行う場合と行わない場合とで事後テストの成績に有意差が見られた。しかし、実際にSlack上で協同学習が行われる場面はほとんどみられなかった。

協同学習がほとんど行われなかったにもかかわらず、学習効果が上がった要因として、社会的存在感が影響していると考えられる。Slackを学習に用いることで、ほかの学習者と一緒に学習を進めているという存在感が影響され、成績の向上が見られたのではないかと考えられる。

参考文献

梅本貴豊・田中健史朗・矢田尚也(2018). 協同学習における動機づけ調整方略尺度の作成. 心理学研究 89(3) pp.292-301